変貌するスキー界の最前線で奮闘する者たち

喝采の舞台裏

Interski in Japan

連載第３回

95シーズン、インタースキーは日本のスキー界にとって最大のイベントとなる。
1995年１月21日から野沢温泉に世界中のスキー教師が集まり、
各国のスキーの指導法とスキー界の現状や将来を展望しながら、
懇親を深めるこのインタースキー大会でのホスト国日本の役割は何か。
また、日本の現状は世界と比べ、どう違い、どのような将来像があるのか。
世界の潮流と照らし合わせ、日本のスキー界の特徴について考察する。

文・写真／志賀仁郎

蔵王からセストリエールへ。インタースキーは巡る

１９７９年、第11回蔵王インタースキーは、海外からの参加者たちに大いなる感動を与え、世界のスキー関係者の親睦を深めて終了した。

１９５１年、ツールスに９カ国１００名の研究者を集めて開催された学術的な会議は約30年の歴史を積み上げ、参加国24カ国、参加人員３０００名の巨大なお祭りになっていた。

「インタースキーは、お祭りなのか、学術的な会議なのか」というのが、蔵王を終えて関係者の間に生じた疑問であった。

１９８３年１月下旬、イタリア北東部、オーストリア、スロベニアとの国境に近いドロミテの小さな村セスト（セクステン）で、第12回インタースキーが開催された。

開会式のムードは実に質素なものであった。入場行進にもまったく音楽がなかったほどで、２０００人の参加者たちは、ただ黙々と雪を踏みしめていた。

インタースキーはお祭りではない。もっと学術的な会議であるべきだという、ホスト国イタリアの意志がそこに見えた。

しかし、その夜から始まったレクチュアのミーティング、次の日から開始された各国の雪上デモンストレーションはイタリア側の思惑とは異なり、従来の大会の再現として、しかも冷やかなムードで進行していった。

参加各国の雪の上でのデモンストレーションにも、レクチュア会場での講演にも、取り立てて新鮮なものはなかったのだ。

「インタースキーはもう終わったよ。ここからは何も持ち帰るべきものはない」と語る声があり、デモバーンに背を向ける姿があった。

第8回アスペンまでのインタースキーには一瞬のうちにも何かを見落とすのではないかという緊張感があった。が、セスト（セクステン）では、雪上のショーは淡々と進行していた。キリー、ルッシ、トエニ、ミッターマイヤーといったワールドカップ、オリンピックのスーパースターたちが各国のデモに混ざって華やかなパフォーマンスを披露したが、それにも冷やかな視線が注がれていた。「彼らがどんなスキーを見せたところで、その国の理論や指導法とは何の関わりもないことだ」とする醒めた見方がそこにあった。

情報革命がスキーの世界にも進行し、今日オーストリアのサン・クリストフで試された技法は、次の日にはフランスのシャモニに伝えられる。アメリカのスキー雑誌に載った技術論文は、数日を待たずに、ヨーロッパの研究者の目に止まる。情報化の時代に入り、４年に1度の大会の意義は薄れてしまっていた。

インタースキーの「各国の技術を比較し、指導理論を闘わせて、それぞれの国の技術理論の発展をうながす」とした理想は、アスペンで達成され、世界中のスキー関係者、指導者が集まり親睦を深めるという、もうひとつの理想も蔵王で達成されてしまっていた。

アメリカのジャーナリスト、ディック・ニーダムが、セスト（セクステン）のレポートに「世界の学究を集めた国際会議は、フランスがその代表団の中から理論家ジョルジュ・ジュベール氏を排除するという政治的な行為によってインタースキーの精神は失われてしまった」と書き、インタースキーは歴史的な使命をすでに終えていると結論付けたのである。

インタースキーは大きな曲がり角にさしかかり、そして、日本のスキー界もこの大会に臨むにあたり、大きな問題を抱えていた。

SAJとSIAの対立という大きな問題

日本の基礎スキー界にとって、4年に1度のインタースキーは、競技の世界のオリンピックに匹敵するビッグイベントである。

今、日本のスキー界はこの国際会議への参加のために発想された技術選・デモ選のふたつの行事を中心に動いていると言っていい状況にある。

そして、ノルディック選手たちの大活躍、アルペン競技の不振といった競技スキーの分野での出来事は、日本のスキー界全体の流れに、さしたる影響を与えていない。日本はヨーロッパのスキー先進国とはまったく異なったムーブメントで動いている国なのである。

その極めて特異なスキースポーツの風土のなかで技術選・デモ選の先に見える最大のイベント、インタースキーは、日本のスキー界を動かす源流として大きく作用をしているのである。だが、その源流で日本のスキー界にとっては極めて厄介な問題が起き、それは今なお解決の方向を見い出せないままに続いている。それは「ＳＡＪとＳＩＡの対立」ということである。

「スキー場に行くとＳＡＪ公認スキー学校の看板をかけてスキーヤーを集めているスキー学校と、ＳＩＡという看板で営業しているスキースクールがあるけど、どっちがいいの」と迷っている初心者がいる。そして、「何で日本にはふたつのスキー教師資格があるの」と不思議に思う人も多い。

このわけのわからない状況を解き明かさない限り、インタースキーの度に繰り返し世界中のスキー指導者たちを悩ませる厄介な問題を説明できないのである。

一般的には「ＳＡＪはずっと昔からあるアマチュアの競技団体、ＳＩＡはプロのスキーヤーたちの集団」なのだが、その実態となると、アマのはずのＳＡＪに所属するスキー教師のほうがプロらしい活動をしていて、彼らのほうがプロらしく見えるという状況がある。

インタースキーをめぐる厄介な問題もその曖昧さから発生しているのである。

日本にプロと自ら名乗って、金をとってスキーをやり、金をとってスキーを教える人々が出現したのは、それほど古い話ではない。

戦前には、プロと名乗りプロ行為をしたとして、全日本スキー連盟（ＳＡＪ）からアマチュア資格を剥奪された人は、ほんの数人に過ぎなかったのだが、１９６０年代に入ってスキーブームと呼ばれる状況が生まれて、にわかにプロと自称する一群のスキーヤーたちが発生し、プロスキー学校と呼ぶスキースク

Zin Shiga

ールが誕生した。

なかにはアルペン競技の世界に活躍した後「競技における名声を金に換える行為」を行なってアマチュアとしての資格を返上した者もいたはずだが、その当時はプロと自称すれば誰でも、その日からプロスキーヤーという安易なプロへの道があった。

そうした曖昧さのなかでプロスキーブームと呼ばれる状況が生まれていたのである。

そのスキーブームの時代、各地のスキー場にあったＳＡＪのスキー指導員の資格をもつスキー教師たちを集めたＳＡＪスキー学校は驚異的なスキー人口の増加の中で、着実に経営の力をつけていた。

ＳＩＡの誕生がもたらした波紋

１９６８年、プロのスキー教師を糾合して日本職業スキー教師連盟（ＳＩＡ）が誕生した。戦前からプロとして活躍していた西村一良、１９６０年にプロスキースクールを開いた若林省三、そしてアルペン競技の名選手であり、のちにオーストリアに渡り、オーストリアの国家検定教師の資格を取得して、自らの名を冠したスキー学校を経営していた杉山進らが、その中心にいたのである。

わずか１００人に満たない、玉石混淆のプロ組織は、１９６８年11月末に西村一良の自宅事務所で発足した。そのスタートは、小さいながら誇り高い理想に燃えた船出であった。

圧倒的な人数をもち、各地に根付いたＳＡＪ公認スキー学校と、わずかながらプロという誇りを支えにしたスキースクールの並立という状況はこの年から始まったのである。

わたしは、その当時「日本にはプロと自称するわずかな数のスキー教師と、アマチュアと称せられる圧倒的多数のプロフェッショナルなスキー教師の集団がある」と書いた。

１９６５年の第7回インタースキーの参加へ向けて発足したデモ選は、ＳＡＪスキー教師たちを統合する絆となって、その組織は巨大化していた。そして各地のＳＡＪ公認スキー学校はその経営基盤を固めていた。

そのＳＡＪがあるスキー場にＳＩＡが入り込むという状況は、プロかアマかといった問題とは言えず、儲かる場所に我も我もと店を出すような状態、そんな様相すら感じさせるものであった。

仕事の場所、儲けになるショバをめぐるテリトリーの争いであった。

各スキー場の地元に根付いたＳＡＪのスキー学校は、長い年月をかけて築き上げてきた自分たちの仕事の場に、突然プロと名乗って入り込んでくるヨソモノに不快感をもった。ようやく商売になるようになったショバを荒されるといった思いだったはずである。

白馬山麓スキー学校とＳＩＡのプロスキースクールとの衝突という事件が話題になったのも、この時期であった。

ＳＩＡのスキー学校は、地元に有名なスキー学校のない地域に着実に根をおろし始めた。

「プロのスキー学校を呼んでまとまったお客を呼ぼう」というスキー場の経営者や、ホテル業者の思惑がＳＩＡスキースクールの伸張をうながそうとしていた。

プロのスキーヤー、プロのスキー学校の出現がいつか混乱を生むであろうことが予感されていたにもかかわらず、ＳＡＪはほとんど何の対応も見せていない。

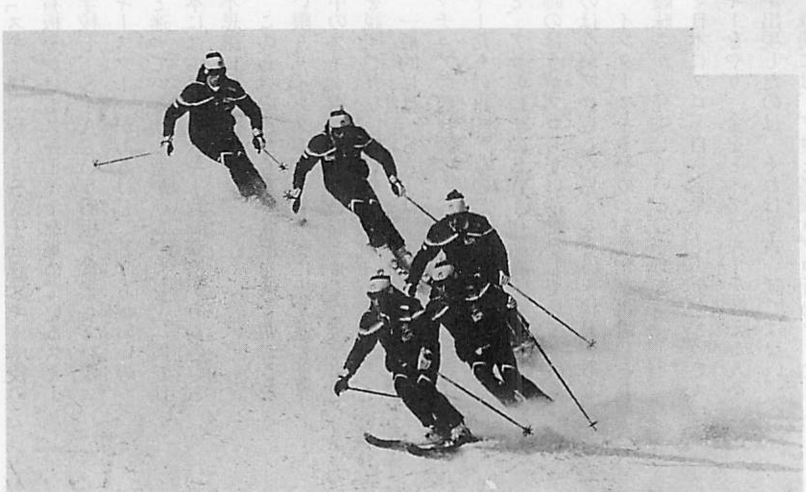
「わずか１００人程度のプロ集団なんて問題にするほどのものではない」とする軽視の姿勢があったし、また、当時まだアマチュアのスキー団体としてプロという言葉に対するアレルギーがあった。

ＳＩＡのリーダー、杉山進の理想と現実

ＳＩＡのリーダーのひとり、杉山進はわたしとの共著「杉山進のトップスキー」（小社１９６６年刊行）の中で、オーストリアにおけるスキー学校の実情をかなり克明に紹介し、次のように書いている。「オーストリアには１

プロスキー協会の中心的な役割を担い、SIAの初代理事長を務めた若林省三氏（右）と1968年苗場スキー学校で行なわれた第1回プロスキーフェスティバルでの三浦雄一郎氏の挨拶風景。後ろにいるのは若林省三氏、西村一良氏、亀倉雄策氏ら。さらに下のすべりの写真は、そのフェスティバルでの競い合う園部勝氏と井上恵三氏

蔵王でのインタースキーは賑やかなお祭りとして記憶された。下の写真は、その蔵王でのオーストリアのデモチームの演技。スキーヤーは左からリーガー・マックス、ロジ・ミッターマイヤー、クリスチャン・ノイロイター



同じ蔵王でのデモンストレーション。上はアメリカチームの演技。アスペンでどの国の技法も歩み寄った後の演技だ。左は75年以降のインタースキーにスピードの要素を持ち込んで主役となったイタリアチームの演技

Zin Shiga

932年に制定されたスキー学校条例があり、各州の条例としてスキー学校の統一と同時に発展のための布石がなされている。

この条例により、ひとつのスキー場にひとつのスキー学校だけが許可される。たとえばサン・アントンにはサン・アントン・スキー学校が、レッヒにはレッヒの、サン・クリストフにはサン・クリストフのといった具合である。日本の○○スキー学校、△△スキー学校、●●スキー学校と都会から団体で編成され、指導員がついてくることはない。

スキーを教わるときは、そこの土地のスキー学校に行くことにより、自分の希望がかなえられるようになっている。

そんな背景があるからこそ、300のスキー場に300のスキー学校が存在するわけだ。将来日本のスキー学校も、その土地のものだけが存在して、学校入学希望者はその学校に行くというようになることが、それぞれの地方発展のためにも、より強力な学校をつくり、正しいスキーを普及させるためにも必要なことであると思う。」

そして、スキー学校の校長は、その村の人人による選挙といった民主的な手段で選ばれ、スキー教師たちも、ほとんどがその村の出身者であるという実情、さらにスキー教師の給料の算出方法に至るまで、詳細にレポートしているのである。

SIA発足当時からその中心にいた杉山の描いたスキー教師、スキー学校のイメージはこの一文のなかに読み取れるが、しかしその理想はどう展開したのだろうか。

現在は違うが、発足当時、プロと名乗れば誰でも入れるという組織作りによって玉石混淆の状態でスタートしたのだが、その玉の部分では、大衆に支持され、経営も充実したいくつかのプロスキー学校が定着した。しかし、石の部分では、プロと呼ぶに値しない、いい加減な集団もまた生まれていたのである。

そして、SIAのスキー学校は、必ずしも杉山が理想とした地域に密着した地域に利益をもたらすものとはなっていない。

逆に、地元のSAJのスキー学校として地元のスキー指導員資格をもつスキー教師を中心に運営され、経営を軌道に乗せたSAJの公認スキー学校が、杉山が描いた理想を実現している。白馬山麓スキー学校、野沢温泉スキー学校、浦佐スキースクールといった有名なスキー学校が、各地に生まれるようになった。

一部では、アマチュアと呼ばれるSAJのスキー学校のほうがプロフェッショナルなスキー教師の集団で、プロと言ってる連中のほうが何か頼りない、といった状況があった。

国際組織ISIAへの加盟が与えた大きな衝撃

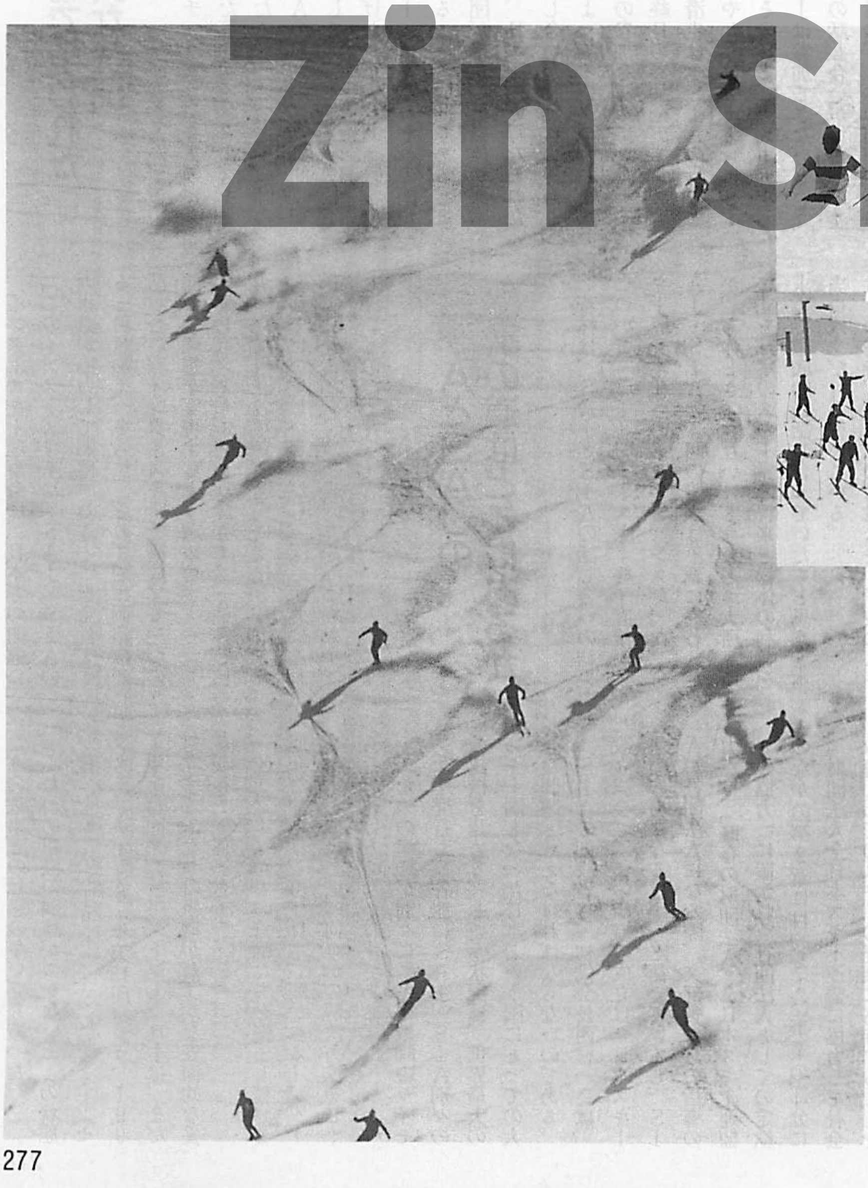
SIA創立の中心人物のひとりでSIAの会長であった若林省三は、SIA20年の回顧のなかで、1979年蔵王インタースキーのSAJとの共催に触れた部分でSAJとSIAの組織の格差について書いている。

「SAJはその歴史、実績、規模のどれをとってもSIAとは雲泥の差がある。その格差を少しでもつめていくにはどこから攻めたらよいか随分と考えた。そこでわれわれがとった手段は外堀を埋めようということだった。」

杉山、黒岩達介のふたりのオーストリア留学経験をもつ理事を中心にSIAは、国際的な立場を築くことに力を注ぐようになった。

「1971年、ガルミッシュでの第9回インタースキーに参加して、SIAの存在を国際的に認知してもらおう」というのが、若林、杉山、黒岩らの思いであった。

杉山はこのガルミッシュインタースキー参加について、SIA20年の歩みのなかで「SIAが最初にインタースキーと関係をもったのは第9回大会でした。SIAができて2年ほど経過した1970年の夏、SAJの鈴木正彦氏より電話をいただきました。『杉山君、来年1月ガルミッシュでインタースキーが開催されるがSIAも参加したければ、組織委員会は歓迎するといっているがどうかね』といった内容でした。SIA理事会ではなんと



70年代にはSAJのなかにプロをしのぐようなスーパースターが誕生した。写真は平川仁彦・藤本進両氏。左の写真は白馬乗鞍での浦佐と岩岳のスクールスタッフによる新雪でのすべりと52・53年当時のSAJスキー学校の体操風景

オーストリアにスキー留学した杉山進氏と、クルッケンハウザー教授の一番信頼あつかったパルトル・ノイマイヤー氏。杉山進氏の日本への帰国直後のすべり

Zin Shiga

か参加しようと決まり、若林、杉山、黒岩の3名の参加が実現しました。」としている。

そのガルミッシュでSIAは、突然、ISIA（国際職業スキー教師連盟）への加盟を果たしている。「我々はSIA発足後2年少しで国際組織に加盟できた満足感一杯で帰国しました」と報告されている。

国際組織、上部組織への加盟が、会員への事前の説明も総会の決議もないままに現地に行った数人の理事者たちだけで決定されるという、一般の常識からはかけ離れた、不思議な出来事であった。

国際的な認知を得た。それは、外圧を利用して事を運ぶ、日本の政治、行政の常套手段だが、スキーの世界にもその発想が生まれていたのである。

このSIAのISIAへの加盟がインタースキーの度に繰り返される、厄介な問題の出発点になった。

SIAは、ISIA加盟に組織の存続を賭け、積極的な外交を展開する。その中心は杉山であった。

1972年のフランスにおけるISIAの総会、続く翌年のオーストリアでの総会に参加してISIAの中に人脈を作り、さらに74年のリヒテンシュタインでの総会には、若林、黒岩を加えた3人で出席、日本におけるプロのスキー教師の集団をアピールした。

オーストリアをはじめとする、ヨーロッパ先進国の人々は、杉山らが訴えるSIAサイドから見た日本の実情に同情的であった。

「それがどんなに小さな集団であっても、プロと名乗りプロとして生活している者たちの集まりならば我々の仲間として一緒にやっていこう」そうしたムードがISIAの中に生まれていた。こうして外堀は埋まっていった。

リヒテンシュタインのISIAの総会の直後に開かれたブリクセンでのインタースキーの理事会にも、彼らはオブザーバーとして出席している。本来この理事会にはSAJから理事がでているのだが、SAJ側は当時、登録されていた天野誠一理事を送っていなかった。

国際的な場で争われた日本の特異な状況

1975年、当時チェコスロバキアのビソケタトリで開催された第10回インタースキーは、日本から参加したふたつのスキー教師の団体、SAJとSIAの対立が、友好的に和やかなムードで進行していた会議にとげとげしい厄介な問題を投げかけていた。

本来インタースキーには、それぞれの国がひとつの代表団を送ることが原則である。日本からふたつの代表団が来ること自体が異常なことだったのだが、日本国内で行なわれたSAJとSIAの話し合いが物別れに終わり、SIAの強い要請によってインタースキーは特例として、SIAの参加を認めていた。

この第10回から最終日の参加全デモンストレーターによる集団滑走はISIAの行事となっていて、その華やかなフィナーレにSIAは参加できるが、その日までナショナルデモを演じていたSAJは参加できないということをめぐって連夜の話し合いがもたれ、インタースキーの関係者は、日本の国内問題に煩わされることになった。

SAJ・SIAの話し合いは決裂し、両組織の対立抗争は頂点に達していた。

第3回、第6回にオブザーバーを出席させ、第7回以降は、デモを含む公式代表団を送り続けてきたSAJの側には、この行事こそ、われわれの積み上げてきた日本の基礎スキーの目標であり、聖域だとする思いがあったろうし、60年余にわたって日本のスキーを推進してきた「本家」としての意識があった。

「われわれの出られる行事にSIAの連中が入って来るのならまだ許せるが、彼らが出られる行事にわれわれが出られないとは」という無念の思いは、SIAに対する激しい憎悪の感情を生んでいた。

そのビソケタトリで、次期1979年第11回インタースキーが日本の蔵王で開催されることが決まった。

インタースキー理事会は、日本での開催に「このインタースキーは、SAJ・SIAの両組織が協力して開催すること」を条件とすると付け加え、さらに、それまでに両組織が話し合い、インタースキーを構成する三つの部会の理想を実現するよう求めた。

蔵王インタースキーの成功は、一度燃え上がった両組織の対立の図式に変化を及ぼそうとしていた。しかしながら、深い憎悪はそれぞれの組織の不信感を拭い去るにはあまりにも深いものだった。

SIAとSAJの協調の道はどこにあるか

若林は、SAJとSIAの話し合いの結果について、「蔵王インタースキー終了直後がスキー界一本化への最高のチャンスだった。SAJ・SIAの4回の協議は不調に終わったが、あのとき、お互いにもうひとつ大所高所に立ち日本のスキー界の将来と総体の利益を求めて徹底的に話し合っていたらと思うと本当に残念だ」と書いている。

その当時、SAJの常設スキー学校のスキー指導員たちはスキー教師協会を作って、プロのスキー教師として活動していた。

その組織はISIAに加盟するに十分な内容をもっていた。しかし、SIA側の何人かの理事は「彼らはアマチュア団体に所属している。もし、ISIAに加盟するなら、SAJを離れて、われわれと一緒になれ」と主張。SAJ側は「SIAのスキー教師たちを含めた、新しいプロフェッショナルなスキー教師の組織を作り、その団体が下部組織としてSAJに加盟し、その上でISIAに参加する」とする主張を譲ろうとはしなかった。

論議は、SAJ側の圧倒的な数と力を背景にした本家意識と、SIA側のISIA加盟団体としての外圧を頼りにした大儀との衝突ではあったが、それは別の見方をすれば、SAJの松浦副会長、菅秀文教育本部長を中心とする何人かの理事とSIAの杉山、黒岩ふたりの理事との私怨の争いでもあった。

ふたつの組織の調整がつかないままの状態が続くなか、次の1983年第12回セスト（セクステン）、1987年第13回バンフ、1991年第14回サン・アントンと、日本は、まだ対立するふたつの組織がわずかな表面的な妥協の末に参加を続けている。

インタースキーの首脳たちを悩まし続ける厄介な問題は、再び日本で開かれるインタースキーを前にして、何らかの解決方法をさぐらなければならないはずである。

ふたつの組織が別々にスキー教師のライセンスを発行し、各地にSAJ、SIA別々の公認校を認める、という状況は、世界最大のスキー国となった日本という国にとっての大きな問題と考えなければならないのである。

SIAの創設当時、初代会長西村一良は、設立総会で、「この組織の成立は全日本スキー連盟の力になるはず」と語っているし、SIAが社団法人になる際、文部省からの指導の力点は、「既存の財団法人、全日本スキー連盟との協力」に置かれ、社団法人としての定款のなかの第2章に目的および事業の部分に「財団法人全日本スキー連盟に協力して社会教育としてのスキーの発展に寄与することを目的とする」と明記することを求めている。

アマとプロの立場の違いから発生したと思われる、SAJとSIAの考え方の違いはお互いの不信感を増幅させて対立の構造を生んできた。しかしながら、1976年以降、100のアマチュア規定は消滅し、オリンピックですら、プロ・アマを問わないトップアスリートたちの世界となり、プロ・アマの問題はさしたる意味を持たなくなっているのである。

インタースキーの3つの部会とは職業的なスキー教師の部会、ボランティアとしてのアマチュア部会、そして学校教育のなかでのスキー指導の部会だが、そのインタースキーの常識に合わせて日本のスキー学校およびスキー教師のあり方、組織の望ましい形を考え直す機会が、野沢インタースキーだと思えるのだが。

（文中敬称略）

Zin Shiga